

NASA/GSFC の K. M. Lau, Hawaii 大の村上氏を始めとしていろいろな研究者に興味をもって頂き、とても有意義な経験となった。このような国際シンポジウムに

出席することを可能にしてくれたのは、日本気象学会国際学術交流基金からの出席補助によるものであり、学会および学会員の方々に深く感謝の意を表します。

日本気象学会誌 気象集誌

第 II 輯 第 66 卷 第 2 号 1988 年 4 月

野田 彰：対流圏における GLM（一般化されたラグランジ平均）子午面運動

Andrew J. Weaver Lawrence A. Mysak：種々の構造を持つ中緯度加熱に対する大気の応答の時間発展モデル

呉 登華・宮原三郎：1979年1月の非定常波の構造と振舞いについて

里村雄彦：局地モデルにおける力学的規準モード初期化法

金谷年展：冬期の太平洋と北アメリカにおける異なった天候レジーム間の遷移過程

池山雅美・武田喬男：西太平洋における雲量の季節・年々変動

——30日周期変動の変化に着目して——

中島健介・松野太郎：熱帯大気中のクラウドクラスターの起源に関する数値実験

二宮洸三・秋山孝子・猪川元興：梅雨前線帯の meso- α -scale convective system の発達と微細構造 Part I
： meso- β -scale 構造

二宮洸三・秋山孝子・猪川元興：梅雨前線帯の meso- α -scale convective system の発達と微細構造 Part II
： meso- γ -scale 構造

藤部文昭：平日と週末の都市気候差 2. 中小都市における気温差の検出

藤部文昭：平日と週末の都市気候差 3. 東京・大阪周辺における地上気温・地上風の分布

Yi-Leng Chen：東部大西洋の水蒸気場に及ぼすクラウドクラスターの影響

要報と質疑

梶川正弘・桜井兼市・菊地勝弘：厳冬期のカナダ北極域における過冷却雨滴の特徴

訂 正

| 巻・号 | 頁 | 誤 | 正 |
|------|-----|----------------|----------------|
| 35.6 | 393 | 金星電離圏観測探査機 2 機 | 金星電離圏観測探査機 1 機 |

の季節変化、オゾンゾンデにより観測された成層圏気温の季節変化が示されています。南極地域のオゾンの全量の減少については、事実の確認に直接関係している論文は、私の1984年の報告、ファーマン達の1985年の報告、ストラルスキー達の1986年のネイチャーの報告の3つに限られると思います。年表からわかります通り、私の1984年の報告は、南極地域におけるオゾンの減少の報告の中では、最初であることは確かです。(オゾンの減少を示した報告はそれ以前にはないという意味で)。しかし南極オゾンホールが発見者が誰かと言うことに対しては、先行した研究が次の研究の土台となり、互いに深く関係しあって進んでおり、どれか一つというのは意味のないことだと思います。日本に於いても南極昭和基地における長期間の観測データの蓄積、少ないデータから大気の本質や因果関係を探り出そうという解析作業の積み重ね、データのチェック、測器の点検整備等の多くの人の仕事があったことを述べて於きたいと思います。次に高杉氏の「潮」の記事についてですが、私のギリ

シアでの1984年のオゾンシンポジウムでの発表については、このシンポジウム発表したオゾンデータは、気象庁内部(高層気象台観測第3課)においてデータの検討が終了し、カナダのオゾンデータセンターへ報告された公式データです。私は決して未確認データを強引に発表したわけではありません。シンポジウムへの参加については励ましこそあれ、デスカレッジさせられるようなことは全くありませんでした。この点、「潮」の記事には不適切な表現があります。

いずれにせよ、昭和基地において観測されたオゾンデータが、南極オゾンホールが発見およびその後の研究に大きな役割を果たしたことは確かです。

編集委員より

1987年1月号の会員の広場での忠鉢氏の談話に観測時の様子が述べられているので、参考にしていただきたいと思います。

第1表 オゾンホール関連年表

| | |
|-----------------|--|
| 1982年2月—1983年1月 | 南極昭和基地においてオゾン総合観測を実施(忠鉢) |
| 1983年10月 | 気象学会において上記観測の速報を発表(口頭発表) |
| 1983年12月 | 第6回極域気水圏シンポジウムにおいて速報を発表(口頭発表) |
| 1984年9月 | ギリシアのオゾンシンポジウムにおいて、1982年2月から1983年1月までのオゾン総合観測の速報を発表(ポスタープロシーディングス印刷) |
| 1984年11月 | 上記内容を国際MAPシンポジウム(京都)において発表(口頭発表、プロシーディングス印刷) |
| 1984年12月 | 上記内容を極地研紀要に発表(論文発表) |
| 1985年6月 | ファーマンがネイチャーにハレーベイにおけるオゾンの減少を発表 |
| 1986年8月 | ストラルスキーらがニンバス7号TOMSによる観測結果をネイチャーに発表 |

訂 正

| 巻・号 | 頁 | 誤 | 正 |
|------|-----|----------------|----------------|
| 35.5 | 328 | 東レ: 昭和63年3月28日 | 日産: 昭和63年3月30日 |
| | | 日産: 昭和63年3月30日 | 東レ: 昭和63年3月28日 |

東レの研究助成は大滝英治会員
日産の研究助成は岩坂泰信会員です。